□水繪に志しし最初の動機

美登里生

私は、小學校時代から大の繪好でしたが、中學に入ると間もなく、今の福岡大學、未だ其頃は縣立であつた福岡病院で一年半程病氣療養しました。御承知の幽境、袖の浦の朝の色、名島の濱の夕景色、多々羅に網引く蜑の樣、さては箱崎八幡の嚴めしき社殿、其他附近の景色が、何れも活ける畫でせう。此四圍の風景は非常に私の頭を變化させました。當時友人に、大變文學趣味を有して居るのが有ました。私も好める道とて常に文筆を弄して唯一の娯樂として居ましたが、神秘の妙は、歌や詩では充分でない、是非共畫の力に倚つて自然の美を捉へねばならんと考へました。で、小學校で習つた鉛筆畫で、おぼつかなくも畫いては失敗し、失敗しては畫きして見ました。其後全快して東京で或る中學四年級に入つた時、乍不完全水彩畫を習いました。其頃大下先生の、水彩畫の栞を買つて大悅び、マア免に角一通り畫いて見て、同好の友人二三人と安繪具を持つて、王子や行德までも出掛けて見事失敗！、併し、其趣味ある事は大なるもので、ナカ〳〵思切れない。都合に依つて歸郷した後も、水彩畫階梯や、其外二三の手引を師としてやつて居ます。今でも私は、水畫程趣味の高尚なものはない、と信じて居ます。殊に野外寫生の興味と來ては、亦格別なものです。

雪の日　赤城泰舒

□自製の架畫

伯耆　幽溪生

僕の自製の野外用架畫は、職人の手を要せず、誰れにも即坐に造られ得る最簡單にて、且堅固なものである故是に其製法を傳授致そう。

先づ直徑一寸長二尺の竹、可成眞直なるもの六本を撰み、其三本は頭を揃へて釘にて綴付け、其下部には漸く其穴に入るべき程の細き竹長三寸のもの三個を各一寸五分宛打込み、之れを繼手となし、他の三本の竹を各篏入す。而て全長の最下部より一尺八寸位の所へ（尤も僕は土下坐の流儀であるから、三脚儿を使用する諸君は二尺六七寸位に）左右の兩竹に折釘を差して畫板受けとなす。之れで上等の架畫が出來したのである。

繼手より取外し、其纏縮めたる容積は僅に長二尺の三寸角以内にして、取扱至極簡便なものである。